

一人の新人監督が、農村の日常を描いた映画を発表しました。監督は田代陽子さん、映画のタイトルは『空想の森』。スクリーンには、「農」に生きる人たちの暮らしが美しく映し出されます。

映画「空想の森」
監督 田代陽子さん



北海道に移住した二組の夫婦の物語。舞台は、北海道の中央部に位置する新得（しんとく）町。道外からやってきてここに根を下ろした二組の夫婦が主人公です。

宮下喜夫さん・文代さん夫妻は、「食べ物を自分でつくって暮らしたい」と関西から移り住んで三十年。無農薬の野菜作りに手探りで取り組みながら、三人の子どものちを独立させました。

山田憲一さん・聡美さん夫妻は、新得共働学舎（心身に悩みを抱えた人たちと共に働く農場）で出会い結婚。憲一さんは近くの牧場に勤め、聡美さんは、ようやく一歳になろうという娘、あかりちゃんを連れて「学舎」の野菜畑に出ます。家族

「農」に生きる人たちの暮らしを描く



映画の1シーン。野菜畑の山田さん母娘

の将来を模索する毎日です。映画は彼らの一年を追って進みますが、大きな事件は何も起こりません。日々の暮らしが淡々と進んでいくだけです。けれど、その中から「貧乏だけど、食べるものがいっぱいあって幸せ」「貯金はないけど新しい

っぱいある」という彼らの生き方が、自然に伝わってきます。

表現したかったのは食べ物の大切さと：

東京生まれの田代さんは、学生時代にカナダで生活したことがあり、帰国後は「狭い東京ではとても暮らせない」と思っ

て北海道に移り住みます。九六年に新得町の山あいの集落で開かれた「空想の森映画祭」をたまたま見に行き、ドキュメント映画のおもしろさに魅せられました。同時に、「そこに集まっている地元の人たちがとにかく楽しそうだった」という強い印象が、田代さんを新得に呼び寄せました。

映画祭の仕掛け人である藤本幸久監督に誘われた田代さんは、映画についての特別な知識も、作品のシナリオもないまま、映画祭で出会った人たちを被写体にして撮影を開始します。しかし、スタッフの間での意見の相違や資金難から、完成までに七年の月日を要しました。

「特にテーマがあったわけではなく、自分の生活している世界を撮っていただけ」。表現したかったのは「食べ物の大切さと、それを作っている人たちの暮らしの豊かさ」だといいます。

厳しい中でも農業選んだ人を尊敬

「食料自給率は本来一〇〇％であるべきだ」という田代さん。農業の現状には危機感を持っています。「グローバルなんて全然よくない。いいものを作るには手間と時間がかかるんです。競争するよりそれが大事です」。農家の経営の厳しさは十分に承知した上で、「それでもその道を選ぶ人たちに尊敬します。これからもそういう人たちとつながって生きていきたい」と語ってくれました。

全国どこへでも上映に出かける

「空想の森」は東京・ポ

レポレ東中野で好評上映中。秋からは大阪での劇場公開のほか、各種映画祭でも上映が予定されています。また、広く自主上映を呼びかけています。田代監督自ら、全国どこへでも出かけるつもりです。

9月6日「あいち国際女性映画祭（名古屋）」「ウィルあいち」
9月14日 空想の森映画祭（北海道新得町）
今秋予定 第七藝術劇場（大阪府淀川区）
上映予定、自主上映の問い合わせ先
空想の森上映委員会
0900(9084)2058

〈上映予定〉

9月5日まで、ポレポ

レ東中野（東京都中野区）